論文					
混相流の数値解法を応用した	自	中	清	史	
※まじた」 社会の中国法語に	九州工業大学	情報工学部	機械情報	工学科	
子動ノンユ軸文の内側油族に	(〒 820-8502 福岡県飯塚市川津 680-4)				
おけるブシュ駆動トルク	笠	原	王	徳*1	
后 范马什 9009 年 9 日 9 日	石	橋	信	彦*2	
原間文11 2000 平 5 万 5 ロ "トライボロジスト" 第 52 巻 第 0 号 (2008) 612~620		九州工業	業大学 大	学院生	
			(1上)	

Abstract Floating bush journal bearings are widely used to support small-sized high speed rotating machinery. The bearing shows the following peculiar phenomena when the supplied pressure is low. That is, the bush-to-journal speed ratio decreases and the disappearance of the oil whip may be observed as the journal rotational speed increases. These could be explained qualitatively when the model with the axial oil film rupture being considered is applied to the inner oil film of the bearing. However, the predictions are in quantitatively poor agreement with the measurements. This paper aims at predicting the bush driving torque of the inner oil film by utilizing the cubic interpolated pseudoparticle (CIP) method that has been developed in the numerical analysis of the multi-phase flow. It is found that the predicted torque is much smaller than the torque obtained from the previous model when the journal speed is high. This results from the incursion of the air into the film from the bearing side end. The effect of some design variables such as the surface tension, which cannot be incorporated in the previous model, on the torque is also shown.

1. はじめに

612

浮動ブシュ軸受は,自動車エンジン用ターボチ ャージャなどの小型高速回転機械の支持軸受に多 用されている.この軸受はジャーナルと軸受の間 に薄肉円筒状のブシュを挿入した構造をしていて

(Fig.1),ジャーナルは、軸受幅中央に設けた給油口から潤滑油を供給するとブシュの内外に形成される直列二重の油膜によって支えられる.ジャーナルが回転すると、ブシュはすきま内で浮動し回転することになる.

浮動ブシュ軸受への給油圧力を低くすると、こ の軸受で発生したオイルホイップが、ジャーナル 回転速度のさらなる高速化にともない消滅するこ とがある¹⁾. また,ジャーナル回転速度の上昇に ともない,ジャーナル回転速度に対する浮動ブシ ュ回転速度の比(以下,浮動ブシュ回転速度比) が低下する. これらの特異な現象は,内側すきま への給油が不十分になると生じ²⁾,内側油膜への



Fig.1 Very high speed floating bush journal bearing

Bush Driving Torque in Inner Oil Film of Floating Bush Journal Bearings with Numerical Analysis for Multi-Phase Flow Being Applied

By Kiyoshi HATAKENAKA, Department of Mechanical Information Science and Technology, Faculty of Computer Science and Systems Engineering, Kyushu Institute of Technology (680-4, Kawazu, Iizuka-shi, Fukuoka 820-8502), Kimito KASAHARA^{*1} and Nobuhiko ISHIBASHI^{*2}, Student, Graduate School, Kyushu Institute of Technology (ditto)

Key Words: hydrodynamic lubrication, floating bush journal bearing, inner oil film, bush driving torque, centrifugal force, surface tension, cubic interpolated pseudoparticle method, two-phase flow

*1 現所属: (株)キャノン (〒146-8501)東京都大田区下丸子 3 丁目 30-2) Present address: Canon Inc. (30-2, Shimomaruko 3-chōme, Oota-ku, Tokyo 146-8501)

*2 現所属:(株)日立製作所(〒100-8280 東京都千代田区丸の内1丁目6-6) Present address: Hitachi, Ltd. (6-6, Marunouchi 1-chōme, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8280) 空気流入による油膜幅の縮小に起因する³⁾.この 空気流入は、高速真円軸受においても確認されて いる⁴⁾.

このような現象は、Koeneke ら⁵⁾が提案した軸 方向油膜破断を考慮したモデルを内側油膜に対し て適用すると、説明することができる.このモデ ルによると、すべり軸受油膜の解析で通常は無視 される遠心力を考慮するとともに、油膜圧力に依 存して密度と粘度が変化するモデル流体を導入す れば、ジャーナル表面近くにおける油膜密度の低 下のために油膜粘度による摩擦トルクが低減する. 著者らは、このトルク算出に必要な計算時間を大 幅に短縮してブシュ内側油膜による駆動トルク

(以下, ブシュ駆動トルク)の計算に適用できる ようにし⁶),高速浮動ブシュ軸受の理論性能予測 を行った⁷⁾.そして,浮動ブシュ回転速度比と安 定性の理論予測値が実測値¹⁾と定性的に一致する ことを示した.しかし,ジャーナル回転速度の上 昇にともない,浮動ブシュ回転速度の実測値は頭 打ちになるが,その理論予測値は増加を続けるこ とが分かった.このように両者は定量的には大幅 に異なるため,現段階でこの理論モデルを実機の 設計に応用することは難しい.

この一因として、ブシュ駆動トルクの低減をも たらす内側油膜内への空気流入が、理論モデルを 用いた場合、軸受端付近におけるジャーナル表面 近くに限られることを挙げることができる。この ような空気流入は、ブシュ内面における円周方向 油膜速度の油膜厚さ方向へのこう配を緩やかにす ることで、ブシュ駆動トルクを低減させる.しか し、その度合いは不十分であるため、浮動ブシュ 回転速度比は低下させるものの、浮動ブシュ回転 速度の上昇を抑制するまでには至らない.一方, 高速ジャーナル軸受油膜の観察実験結果^{3,4}のよ うに、理論モデルによっても、潤滑油と空気の境 界面が、運転状態に応じて軸受すきま内を移動で きるようにすれば、ブシュ駆動トルクの低減に対 して、その速度こう配のみならず粘度の低下をも 反映できる.これにより、ブシュ駆動トルクの低 減の度合いがいっそう増すことになり、理論予測 値と実測値とが定量的な一致へ向かうであろうと 著者らは考えた.

このため本研究では、高速浮動ブシュ軸受の内 側油膜の解析に、混相流の数値解法の一つである CCUP法(CIP and Combined Unified Procedure, CIP 法による混相流の統一解法)^Nを応用してブ シュ駆動トルクを求め、従来の理論予測値^{OD}との 比較を行うとともに、浮動ブシュ軸受内側油膜に 関するいくつかの設計変数の影響について明らか にすることを目的とする.なおこれらの中には、 モデル流体を用いる従来の理論モデルにおいて導 入することが困難であった、潤滑油と空気の境界 面に作用する表面張力を含む.

613

本論文では無次元量による解析を行う.使用す る主な記号は次の通りである.無次元量の定義 (有次元量との関係)は付録に掲載する

	Ca	: キャピラリ数
	Ca'	: 軸受キャピラリ数(= <i>Ca</i> / <i>v</i>)
	Fc	: カラー関数
	$F_{\mathrm{s}\eta}, F_{\mathrm{s}Z}$:表面張力の油膜厚さ方向,軸方向
		の各成分
	J	: η軸方向の格子分割数
	K	: Z 軸方向の格子分割数
	Ρ	: 油膜圧力
	$P_{ m atm}$: 大気圧
	Re	:修正レイノルズ数
	Re'	: 軸受レイノルズ数(= Re/v)
	S	: ゾンマーフェルト数
	$V_{\Theta}, V_{\eta}, V_Z$:油膜速度の円周方向,油膜厚さ方
		向,軸方向の各成分
	α	: 浮動ブシュ回転速度比
	Δ	:密度
	$ heta, \eta, Z$:円周方向,油膜厚さ方向,軸方向
		の各座標
	K	: 潤滑油と空気の境界面の曲率
	λ ,	: 軸受定数(= S/ ν)
	Λ	: 軸受幅径比
	$M_{\rm c}$:粘度
	ν	: ジャーナル回転速度
	Π_{b}	:ブシュ駆動トルク
	ψ	:軸受すきま比
	au	:時間
浙	字など	
	air	・空気を表す

-53-

in	: 給油を表す
j	:η 軸方向の離散点番号を表す
k	:2 軸方向の離散点番号を表す
n	:離散時刻 $ au_n$ を表す
oil	: 潤滑油を表す

2. 理論解析

2.1 解析対象

本研究では、軸受幅中央に全円周油溝を有する 高速浮動ブシュ軸受(Fig.1)の内側油膜を想定し、 同心状態のもと、速度比 α で回転するジャーナル ならびに浮動ブシュの間に形成される油膜を解析 の対象とする^の. 軸受幅中央に関する対称性を考 慮して、ジャーナル表面が $\eta = 0$, 浮動ブシュ内 面が $\eta = 1$, 油膜入口部が Z = 0, 軸受端が Z =1/2 となるように、半幅油膜について座標軸を Fig.2 のように設定する. $Z \leq 0$ は全円周油溝内に、 Z > 1/2は油膜外部に相当する.

2.2 支配方程式と境界条件

油膜の速度および圧力の分布を規定する連続の 式および NS 方程式 (Navier-Stokes ナビエ・ス トークス) に対して,通常の流体潤滑理論で用い られる仮定を適用し,さらに,ジャーナルの高速 回転により生じる遠心力,潤滑油と空気の境界面 に作用する表面張力,および,油膜速度の時間微 分項を取り入れると,連続の式は

$$\frac{\partial V_{\eta}}{\partial \eta} + \frac{\partial V_Z}{\partial Z} = 0 \tag{1}$$

NS 方程式は

$$\frac{\partial V_{\theta}}{\partial \tau} = \frac{\psi}{Re} \frac{1}{\Delta} \frac{\partial}{\partial \eta} \left(M \frac{\partial V_{\theta}}{\partial \eta} \right)$$
(2.a)

$$\frac{\partial V_{\eta}}{\partial \tau} = -\frac{1}{\psi SRe} \frac{1}{\Delta} \frac{\partial P}{\partial \eta} + \frac{V_{\Theta}^{2}}{\psi} + \frac{F_{s\eta}}{\Delta} \qquad (2.b)$$

$$\frac{\partial V_{z}}{\partial \tau} = -\frac{\psi}{4A^{2}SRe} \frac{1}{\Delta} \frac{\partial P}{\partial Z} + \frac{\psi}{Re} \frac{1}{\Delta} \frac{\partial}{\partial \eta} \left(M \frac{\partial V_{z}}{\partial \eta} \right) + \frac{F_{s\bar{z}}}{\Delta}$$
(2.c)

式(2.b)と式(2.c) における右辺第3項の表面張力 F_{sn}ならびに F_{sZ}は,潤滑油と空気の境界面が,数



- Grid points for discretized value of P, V_{Θ} , F_c , Δ , M
- Grid points for discretized value of V_{η}
- → Grid points for discretized value of V_Z

Grid points in the fence have identical number of j and k.

Fig.2 Coordinate system $(\eta - Z)$ and staggered grid system in very high speed oil film

値解析で用いる計算格子に重ならなくても,表面 張力を考慮した解析ができるように考案された CSFモデル (Continuum Surface Forc e,連続表面 力)⁹を適用すると,

$$F_{s\eta} = \frac{K}{CaRe(Fc_{oil} - Fc_{air})} \frac{\partial Fc}{\partial \eta}$$
(3.a)

$$F_{sZ} = \frac{\psi^2 K}{4\Lambda^2 CaRe(Fc_{\rm oil} - Fc_{\rm air})} \frac{\partial Fc}{\partial Z} \qquad (3.b)$$

ここで,境界面の曲率 Kは,数個程度の計算格子 幅の範囲にまで表面張力の作用が及ぶように,文 献⁸⁾における式(6.99)に準じて求めた,平滑化し たカラー関数 *Fc* を用いて,

$$K = -\frac{\partial}{\partial \eta} \left[\frac{\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial \eta}}{\sqrt{\left(\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial \eta}\right)^2 + \frac{\psi^2}{4\Lambda^2} \left(\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial Z}\right)^2}} \right] -\frac{\psi^2}{4\Lambda^2} \frac{\partial}{\partial Z} \left[\frac{\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial Z}}{\sqrt{\left(\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial \eta}\right)^2 + \frac{\psi^2}{4\Lambda^2} \left(\frac{\partial \widetilde{Fc}}{\partial Z}\right)^2}} \right]$$
(4)

カラー関数 Fcの分布は、移流方程式

$$\frac{\partial F_{\rm c}}{\partial \tau} + V_{\eta} \frac{\partial F_{\rm c}}{\partial \eta} + V_Z \frac{\partial F_{\rm c}}{\partial Z} = 0 \tag{5}$$

を解いて求める.油膜の密度 △と粘度 Mは、カ

ラー関数 Fcを用いて,

$$\Delta = \frac{(Fc - Fc_{\text{air}}) + (Fc_{\text{oil}} - Fc)\Delta_{\text{air}}}{(Fc_{\text{oil}} - Fc_{\text{air}})}$$
(6.a)

$$M = \frac{(Fc - Fc_{\text{air}}) + (Fc_{\text{oil}} - Fc)M_{\text{air}}}{(Fc_{\text{oil}} - Fc_{\text{air}})}$$
(6.b)

により算出する.なお、本研究では $F_{coil}=1$, $F_{cair}=-1$ とした.

式(1),式(2)および式(5)の境界条件は次のよう に与える.カラー関数 Fcに対しては、ジャーナ ル表面 (η =0)ならびに浮動ブシュ内面 (η =1) において濡れ角は 0,つまり、 $\partial Fc/\partial \eta$ =0とし、

全円周油溝内 $(Z \leq 0)$ で, $Fc = Fc_{oil}$ (7.a)

油膜外部 (Z > 1/2) で、 $Fc = Fc_{air}$ (7.b)

油膜速度の境界条件は,

$$\eta = 0 \ \ \ C, \ \ V_{\Theta} = 1, \ \ V_{\eta} = 0, \ \ V_{Z} = 0$$
 (8.a)

$$\eta = 1$$
 \mathcal{C} , $V_{\Theta} = \alpha$, $V_{\eta} = 0$, $V_Z = 0$ (8.b)

$$Z = \frac{1}{2} \mathfrak{C}, \quad \frac{\partial V_{\eta}}{\partial Z} = 0, \quad \frac{\partial V_{Z}}{\partial Z} = 0 \quad (8.d)$$

油膜圧力 P(η,Z)の境界条件は,

$$\eta = 0 \ge \eta = 1$$
 $\operatorname{Crlt}, \quad \frac{\partial P}{\partial \eta} = SRe\Delta V_{\theta}^{2} \quad (9.a)$

全円周油溝内では
$$\frac{\partial P}{\partial \eta} = SRe\Delta_{oil}V_{\theta}^2$$
 であり,
 $P(1, 0) = P_{in}$ (9.b)

油膜外部では
$$\frac{\partial P}{\partial \eta} = SRe\Delta_{air}V_{\theta}^{2}$$
 であり,
 $P\left(1, \frac{1}{2}\right) = P_{atm}$ (9.c)

2.3 数値解法の手順

油膜内の圧力 P, 速度 V_{Θ} , V_{z} , カラー

Table 1 Correlation of equations with variables

Equation No.	Input	Output		
Eqs. (1) and (2)	$ \Delta, M, F_{\mathcal{C}}, $ $ (V_{\Theta}, V_{\eta}, V_{Z})^{*} $	$V_{\Theta}, V_{\eta}, V_{Z}, F$		
Eq. (5)	$(V_{\eta}, V_Z, F_c)^*$	Fc		
Eq. (6)	Fc	Δ, M		

V	aria	bles	in	the	parent	hesis	represent	\mathbf{the}	previous	time sto	ep.
---	------	------	----	-----	--------	-------	-----------	----------------	----------	----------	-----



Fig.3 Flow chart of numerical analysis for bush driving torque

関数 F_c ,密度 Δ ,粘度 Mの分布を,式(1),式(2), 式(5),式(6)を用いて求める.これらの変数と式 は Table 1 に示すような相互関係があるので, Fig.3 に示すフローチャートに従って,離散時刻に おける数値解を求めることにする.

まず、Fig.2 に示すように半幅油膜を等間隔格子 に分割する. η 軸方向、Z軸方向の分割数はそれ ぞれ J、K とする. 格子線に囲まれた四角形領域 (以下、セル)の中央に V_{\bullet} 、P、Fc、 Δ 、Mに 対する離散点(図中〇)を、 η 軸方向に隣接す るセルの境界に V_{η} に対する離散点(図中 \uparrow)を、 Z軸方向に隣接するセルの境界に V_{z} に対する離散 点(図中 \rightarrow)を配置する. 破線(図中(\Box_{z}))で囲 まれた離散点〇、 \uparrow 、 \rightarrow の番号(j, k) は同じと

 $P_{\rm in}$ 0.02 Ca' Δ $1\,{\times}\,10$ $^{-3}$ Re' λ 4 $1\,{\times}\,10$ $^{-3}$ 0.1 ψ a 1×10^{-2} Λ 0.4 $M_{\rm air}$ 1×10^{-3} 1~10 $\Delta_{\rm air}$

Table 2 Constants for base case

する.

離散点 (j, k) の離散時刻 τ_n における各変数の値 は次のように求める.まず, Table 2 に示すよう な計算条件の数値を与え,また,基準時刻 τ_0 にお ける変数の分布を与える.時刻を刻み幅 $\Delta \tau$ 進め る.二次元 CIP 法¹⁰を適用して式(5)を解き, Fc の分布を求める.これを式(6)に代入し, Δ , Mの 分布を計算する. V_{Θ} の分布は,式(2.a)を, τ 軸方 向には陰解法を, η 軸方向には中心差分法を適用 して離散化し,三重対角行列解法を用いて求める. 次に,式(1),式(2.b),式(2.c)の解法に SIMPLE 法 (Semi-Implicit Method for Pressure-Linked Equation, 圧力結合方程式の半陰解法)¹¹⁾を採用 し, P, V_η , V_Z を求める.最後にブシュ駆動ト ルク Π_h を,

$$\Pi_{\rm b} = 4\pi \int_0^{1/2} \left(M \frac{\partial V_{\Theta}}{\partial \eta} \right)_{\eta=1} dZ \qquad (10)$$

より計算する.この過程を, *II*_bの変動がなくなる まで,あるいは, *II*_bが周期的に変動するようにな るまで繰り返す.

3. 解析結果および考察

3.1 従来のモデルとの比較と表面張力の影響

Table 2 に示すケースについてブシュ駆動トル ク Π_b を求めた.ただし,式(2)と式(3)に与えるゾ ンマーフェルト数S,キャピラリ数Ca,修正レイ ノルズ数Reは,それぞれ $\nu\lambda$, ν Ca', ν Re'によ り計算する.また,本研究では外側油膜は解析対 象ではないため,浮動ブシュの内側油膜による駆 動トルクと外側油膜による制動トルクとの釣合い から本来は定まる浮動ブシュ回転速度比 α の値に 対して定数を与えている.その結果は Fig.4 の実 線のようになる.なお,2.3 解法の手順で述べた



Fig.4 The variation of bush driving torque with respect to journal speed (Comparison of present and previous analyses and effect of bearing capillary number)

ように、 Π_b が一定値に落ち着かずに変動した場合 には、その時間平均値を示してある。同図中には、 モデル流体を用いる従来の理論モデル⁽⁶⁾により求 めた Π_b を点線で、軸受キャピラリ数 *Ca*³ を0.01 倍にした場合の Π_b を一点鎖線で、式(2.b)と式 (2.c)における右辺第 3 項の表面張力を無視した場 合に対応する *Ca*³ = ∞ の Π_b を破線で示してある。 なお二点鎖線は、ペトロフの式⁽¹⁾を適用して求め た、回転同心二重円筒間のすきまを潤滑油が満た す場合の Π_b (= $2\pi(1-\alpha)$)である。

従来の理論モデルに比べ、本モデルによる $\Pi_{\rm b}$ は、ジャーナル回転速度 ν が低いうちは、ペトロ フの式による値からの低下は小さいが、 ν の増加 とともに、その減少の度合いを増し、従来のモデ ルによる $\Pi_{\rm b}$ を大幅に下回り、すきま全体を空気 が満たす場合の値(= $2\pi(1-\alpha) M_{\rm air}$)に漸近する ことが分かった.この程度にまで $\Pi_{\rm b}$ が低下する ので、本モデルの発展により、従来の理論モデル では不可能であった浮動ブシュ回転速度の上昇抑 制を予測できると考えられる.

次に、ジャーナル回転速度 ν の増加にともない Π_{b} が低減していく原因を明らかにするために、す きま内の密度 Δ ならびに三つの軸方向座標Z(= 0.125,0.25,0.375)における円周方向速度 V_{Θ} の 分布を Fig.5 に示す. $\eta - Z$ 平面に示した密度分布 では、白色は潤滑油に、灰色は空気に対応してい て、灰色がかった色調ほど低密度を表す.この平 面に直交するように、円周方向速度 V_{Θ} の η 軸方 向分布は描いてある.

ジャーナル表面付近への空気流入がある場合に

は、潤滑油と空気の境界面付近における粘度変化 に起因して、 Vaの n軸方向への速度こう配が大 きく変化する.この変化は、粘度が狭い範囲で変 化するほど、大きくなる.本解析によると、従来 の理論モデルに比べて明瞭な境界面が得られるた め、粘度が狭い範囲で変化することになる.この ため、ブシュ内面におけるその速度こう配がいっ そう緩やかになることが分かった. Table 2 に示 すケースでは, Fig.5(a)に示すように, ジャーナ ル回転速度 v=8までは、軸受端側から始まった 空気流入が、 νの増加とともに、 全円周油溝側へ 向けて、従来の理論モデルよりも緩やかにではあ るが、進行していく.このため、ブシュ内面にお けるその速度こう配が緩やかな範囲が全円周油溝 側へ向けて広がることで、ブシュ駆動トルク II_b が低下することになる.

ジャーナル回転速度 ν が上昇し, $\nu = 9$ になる と, Fig.5(b)に示すように, 大幅な空気流入が生 じ, 潤滑油と空気の境界面が全円周油溝側に向け て移動する. この移動は, 従来の理論モデルから は得られない. 空気がジャーナル表面からブシュ 内面までを占めると, 円周方向速度 V_{Θ} はクエッ ト流れになり, その η 軸方向の速度こう配に変化 が見られなくなるが, ブシュ内面での粘度は M_{air} になる. また, ジャーナル表面付近にのみ空気が 流入する範囲も残っており, ここではその速度こ う配が緩やかになる. これらの結果, ブシュ駆動 トルク Π_{b} はいっそう低下することになる.

ジャーナル回転速度がさらに上昇し $\nu = 10$ になると、Fig.5(c)に示すように、空気がすきま内の大部分を占めるようになる. これによるブシュ内面における粘度低下のために、 Π_b はさらに低下することになる.

次に,軸受キャピラリ数*Ca*(表面張力の逆数 に対応する無次元数)の影響についても同様に調 べた.遠心力の作用によってジャーナル表面付近 への空気流入が生じる場合,表面張力は潤滑油と 空気の境界面の曲率を小さくする方向に作用する. 遠心力が空気流入を促すのに対し,ジャーナル回 転速度 νの小さいうちは,境界面の曲率中心が潤 滑油内にあるため,表面張力はそれを阻害するよ うに作用する.このため,表面張力の作用が大き



Fig.5 Density distribution in the film and circumferential velocity distribution across the film for base case listed in Table 2

617



Fig.6 The variation of bush driving torque with respect to journal speed (Effect of supplying pressure)

い(Ca'が小さい)ほど, νの増加にともなうブ シュ駆動トルク II_bの低下は緩やかになる.

しかし、Fig.5(b)のように空気が大幅に流入す るようになると、境界面の曲率中心が空気側に移 動するため、表面張力は空気流入を促す作用をす るようになり、 ν の増加にともなうブシュ駆動ト ルク Π_b の低下は急になる。全円周油溝近くまで を空気が占めるようになると、給油圧力 $P_{\rm in}$ と大 気圧との静圧差による潤滑油内での圧力勾配が大 きくなるため、空気流入は徐々に進行する。この 結果、 Π_b の低下はわずかずつになる。

軸受キャピラリ数*Ca*^{*}が小さい場合の空気流入の傾向は,津田ら³⁾や田中ら⁴⁾による実験的な観察 結果を定性的に説明している.

3.2 給油圧力の影響

Table 2 において給油圧力 P_{in} の指定を外してブ シュ駆動トルク Π_b を求めた. $P_{in} = 0.01$, 0.02, 0.03, 0.04 に対する結果を, Fig.6の破線, 実線, 点線, 一点鎖線にそれぞれ示す. 二点鎖線はペト ロフの式¹¹⁾による Π_b (= $2\pi(1-\alpha)$)を表す. 給油 圧力 P_{in} が小さいほど,遠心力の効果が相対的に 大きくなり,ジャーナル表面近くの圧力が低下す る. この結果,空気が流入する範囲が拡大する. このため,ジャーナル回転速度 ν が上昇するほど Π_b の低下が大きくなる. また,全円周油溝側近く までを空気が占めるようになっても,潤滑油内に おける圧力勾配が大きくはならないために空気流 入がいっそう進み, Π_b をさらに低下させることに なる. このような Π_b に対する P_{in} の影響は従来の 理論モデル⁶と同様であることが分かった.

3.3 軸受定数の影響



Fig.7 The variation of bush driving torque with respect to journal speed (Effect of bearing modulus)



Fig.8 The variation of bush driving torque with respect to journal speed (Effect of bush-to-journal speed ratio)

Table 2 において軸受定数 λ の指定を外してブ シュ駆動トルク Π_b を求めた. λ =40, 4, 0.4 に対 する結果を, Fig7の破線,実線,点線にそれぞれ 示す. 二点鎖線はペトロフの式¹¹⁾による Π_b (= 2 π (1- α))を表す. 軸受定数 λ が大きいほど,潤滑 油内における圧力勾配に比べて,遠心力の効果が 相対的に大きくなり,ジャーナル表面近くの圧力 が低下する.また,表面張力の作用も相対的に大 きくなる.このため,空気がいったん流入すると, 全円周油溝近くまでを占めるようになる.この結 果,ジャーナル回転速度 ν の上昇にともない, Π_b が急激に低下することになる.このような Π_b に 対する λ の影響は従来の理論モデ ν^{0} と同様な傾 向を示す一方で,定量的には Π_b を大幅に低減さ せることが分かった.

3.4 浮動ブシュ回転速度比の影響

Table 2 において浮動ブシュ回転速度比 α の指 定を外した場合のブシュ駆動トルク Π_{b} を求めた. $\alpha = 0, 0.1, 0.2, 0.3$ に対する結果を, Fig.8の破 線,実線,点線,一点鎖線にそれぞれ示す.浮動 ブシュ回転速度比 α が大きいと,二点鎖線が表す ペトロフの式¹¹⁾による $\Pi_{\rm b}$ (= 2π (1- α))の値は小 さい.また,円周方向速度 V_{Θ} の平均が増すため に遠心力の効果が大きくなり,ジャーナル回転速 度 ν が小さいうちから, $\Pi_{\rm b}$ の低下が始まる.

3.5 軸受レイノルズ数の影響

Table 2 において軸受レイノルズ数 *Re'*の指定 を外してブシュ駆動トルク Π_b を求めた. *Re'* = 1×10^{-2} , 1×10^{-3} , 1×10^{-4} に対する結果を, Fig.9 の破線,実線,点線にそれぞれ示す.二点鎖線は ペトロフの式¹¹⁾による Π_b (= $2\pi(1-\alpha)$)を表す.軸 受レイノルズ数*Re'*が大きいほど,ジャーナル回 転速度 ν の上昇にともない, Π_b が急激に低下する. しかし,潤滑油内における圧力勾配に加えて粘性 力も相対的に小さくなるため, Π_b の低下は軸受定 数 λ ほどには急峻にならない.

3.6 軸受すきま比, 軸受幅径比, 空気粘度の影響 軸受すきま比 ψ が大きいと,表面張力の作用 が相対的に大きくなる.このため,軸受キャピラ リ数*Ca*' が小さい場合と同様な影響がブシュ駆動 トルク *I*、に対して現れることが分かった.

なお, ブシュ駆動トルク *Π*_bに対する軸受幅径 比 *Λ*ならびに空気の粘度 *M*_{sir}の影響は小さかった. 3.7 計算時間

本研究で提示したブシュ駆動トルク II_bの計算 は、従来の理論モデルによる結果を一ケースあた り10s程度で得ることのできるパーソナルコンピ ュータを使用して実施した.本解析モデルでは、 II_bの値を得るまでに、一ケースあたり、短い場合 で7×3600s(=7h)、長い場合だと300×3600s (=300 h)以上の計算時間を要した.浮動ブシュ軸 受の性能予測では、II_bの値を何度も計算して求め る必要がある.このため、本解析法をそのまま適 用すると、膨大な計算時間を要することになる. 今後は、計算時間を大幅に短縮できるような工夫 が必要となる.

4. まとめ

本研究では、CCUP法⁸⁾を応用して高速浮動ブ シュ軸受の内側油膜を解析し、ブシュ駆動トルク



Fig.9 The variation of bush driving torque with respect to journal speed (Effect of bearing Reynolds number)

を求めた、得られた知見を以下にまとめる、本解 析モデルにより求めたブシュ駆動トルクの、給油 圧力, 軸受定数, 浮動ブシュ回転速度比, 軸受レ イノルズ数などの、浮動ブシュ軸受の内側油膜に 関する軸受設計変数、ならびに、ジャーナル回転 速度に対する傾向は、モデル流体を用いる従来の 理論モデルによる傾向と定性的に一致した、しか し、定量的には大きな差があり、本解析モデルで は、潤滑油と空気の境界面が全円周油溝側へ移動 するために、ブシュ駆動トルクは大幅に低減する ことになる. なお、従来の理論モデルでは導入が 困難であった、潤滑油と空気の境界面に作用する 表面張力の影響が明らかになった.本解析モデル を発展させることにより、従来の理論モデルでは 不可能であった浮動ブシュ回転速度の上昇抑制を 予測できると考えられる.しかし,現段階ではあ まりにも多くの計算時間が必要となるため、これ を大幅に短縮するための工夫をしなければならな い

文 献

- 多々良:浮動ブシュ軸受の制振効果に関する実験的研究,機誌,72,610 (1969) 1564.
- 2) 鶴田・津田:浮動ブッシュ軸受の高速ふれまわり抑制 効果に関する研究,潤滑,30,11 (1985) 838.
- 2) 津田・高橋・弦巻:外側給油の高回転プッシュと軸の 間の油膜消失の観察,潤滑,30,1 (1985) 69.
- 4) 田中・中野・鈴木:高速すべり軸受の軸方向油膜破断,
 (社)日本トライボロジー学会,トライボロジー会議予 稿集 東京 2000-5 (2000) 277.
- C. E. Koeneke, M. Tanaka & H. Motoi: Axial Oil Film Rupture in High Speed Bearings Due to the Effect of the Centrifugal Force, ASME J. Tribology, 117, 3

619

(1995) 394.

- 6) 畠中・田中・鈴木:遠心力の作用を考慮した修正レイ ノルズ方程式の導出と浮動ブッシュ軸受への適用、機 論, 65, 636 C (1999) 3395.
- 畠中・田中・鈴木:軸方向油膜破断を生じた超高速す 7) べり軸受油膜の動特性解析と浮動ブッシュ軸受で支え られたロータの安定性解析への応用,機論,65,640 C (1999) 4840.
- 矢部・内海・尾形: CIP法, 森北出版 (2003) 148. 8)
- J. U. Brackbill, C. B. Kothe & C. Zemach: A Continu-9) um Method for Modeling Surface Tension, J. Computational Physics, 100, (1992) 335.
- 10) T. Yabe, T. Ishikawa, P. Y. Wang, T. Aoki, Y. Kadota & F. Ikeda: A Universal Solver for Hyperbolic Equa- tions by Cubic-Polynomial Interpolation II. Two - and Three - Dimensional Solvers, Computer Physics Com- munications, 66, (1991) 233.
- 11) (社)日本トライボロジー学会編:トライボロジー辞典, 養賢堂 (1995) 238.
- 12) 荒川:数值流体工学, 東京大学出版会 (1994) 29.

付 録

本論文で使用した無次元量と有次元量との関係 は次の通りである.

$$\begin{split} Ca &= r_1 \rho_{\text{oil}} \omega_1 / \sigma \\ F_{sZ} &= f_{sz} / (l_1 \rho_{\text{oil}} \omega_1^{-2}) \\ F_{s\eta} &= f_{sr} / (c_1 \rho_{\text{oil}} \omega_1^{-2}) \\ P &= r_1 l_1 p / w_1 \\ Re &= c_1^{-3} \rho_{\text{oil}} \omega_1 / (r_1 \mu_{\text{oil}}) \end{split}$$

$$\begin{split} S &= r_1^{\ 3} l_1 \mu_{\rm oil} \omega_1 / (w_1 c_1^{\ 2}) \\ V_Z &= v_z \, / (l_1 \omega_1) \\ V_\eta &= v_r \, / (c_1 \omega_1) \\ V_\Theta &= v_\theta \, / (r_1 \omega_1) \\ Z &= z / l_1 \\ \alpha &= \omega_2 / \omega_1 \\ \Delta &= \rho \, / \rho_{\rm oil} \\ \eta &= (r - r_1) / c_1 \\ K &= c_1 \kappa \\ \Lambda &= l_1 / (2r_1) \\ M &= \mu \, / \mu_{\rm oil} \\ \nu &= \omega_1 \sqrt{c_1 / g} \\ \psi &= c_1 / r_1 \\ \tau &= \omega_1 t \end{split}$$

·2 .

ただし、 c_1 :内側油膜の軸受平均半径すきま、 f.r: 表面張力の半径方向成分, f.s.: 表面張力の軸 方向成分,g:重力加速度,l₁:内側油膜の軸受幅, p:油膜圧力, r:半径方向座標, r₁:ジャーナル 半径,t:時間,v:油膜速度の半径方向成分, v,:油膜速度の軸方向成分, v_θ:油膜速度の円周方 向成分, wa: 軸受荷重, z: 軸方向座標, κ: 潤滑 油と空気の境界面の曲率, μ:粘度, ρ:密度, σ :表面張力, ω_1 :ジャーナル角速度, ω_2 :浮動 ブシュ角速度